

# 病院看護における化粧に関する研究

杏林大学保健学部

千葉大学看護学部

大河原 千鶴子・金井 和子

The purpose of this study is to make clear the effectiveness to self-consciousness of hospital nurses concerning the use of cosmetics on themselves. The study consists of 5 parts as follows; In part 1, 269 hospital nurses were asked about their habit to make-up and self-consciousness to it by questionnaire. In part 2, 234 hospital nurses who are employed in three hospitals in different area were asked same questions as part 1. In part 3, 67 nursing school teachers and bedside nurse leaders were asked same questions as part 1 and effectiveness to patients about make-up of nurse moreover. In part 4, 60 patients belong in a hospital were asked their impressions about make-up of nurses by interview and questionnaire. In part 5, 99 nursing school teachers and bedside nurse leaders were asked how the make-up on them affect to their feelings by questionnaire. The results are as follows:

1. There are 85% nurses who use cosmetics on their working hours, but it makes a some differences about both area of hospital and their age. Some nurses of a hospital in thirties and forties have no time of their make-up for they are compatible with an employment and a home life.
2. Many nurses answer in the affirmative about their make-up in working hours. They say that to make-up themselves increase tensible force and make positive attitude them in working hours.
3. Many patients also answer in the affirmative about make-up of nurse. As desirable image for make-up of nurse many patients point out such as "clean and fresh" "healthy and cheerful" "mild and grace" as the feelings of nurse.

## 1 緒言

我々は魅力ある職業イメージへの脱皮・転換に必要な要因の一つとして「看護婦の化粧」をとりあげ、化粧の効果に対する看護婦の意識を把握し、現代看護婦の好ましい化粧のあり方について提言することを目的として、5回にわたる質問紙調査および看護の管理職を対象に聞き取り調査を行ってきた。

その結果、浦和市内の2総合病院に勤務する看護婦296名を対象とした調査Ⅰでは、勤務時に「化粧をする」ものは85.1%で日常より高く、年齢と

共に上昇傾向を示していた。「香り」への配慮、化粧する理由の「身だしなみ」の内容に年代差がみられ、年齢的要因が高いことがわかった。また化粧により気持ちが多少なりと「変化する」のは約60%を占めていた。

調査Ⅱ<sup>4)</sup>として、看護婦の化粧は年齢的要因が主であるのか更に意識を探る意味で、地域の異なる2病院の看護婦234名を対象として、調査Ⅰの内容に化粧品の種類を加え調査を行った。年齢要因に多少の地域差は認められたが、概して同じような傾向であった。しかし中堅の30および40代に職業と家庭の両立、育児のために忙しく「化粧したくても出来ない」ものがあり、したがって化粧したときの気持ちの変化が大きいたことが一施設の特徴として見いだされた。

調査Ⅰおよび調査Ⅱを基礎調査として、調査Ⅲの概要を加え中間報告を行った。本稿では調査Ⅲの分析・検討結果と調査ⅣおよびⅤに加え、看護の管理職に対する聞き取り調査の結果を検討し、最終報告としたい。

A Study on the Actual Situation of Make-up,  
Cosmetics and Personal Appearance of  
Hospital Nurse

Chizuko Ohkawara

School of Health Sciences,  
Kyorin University



## 2 調査Ⅲ

### 2-1 目的

調査Ⅱで3地域・施設における看護婦の化粧に開して比較検討を行ったところ、谷津の30および40代に結婚、育児のためにゆとりがなく、化粧をしたくても出来ないという特徴があったことを前述した。看護婦の中でこの年代は、勤務を継続していれば看護のキャリアを積みいけば中堅リーダーおよび管理職である。

そこで調査Ⅲとしては、30および40代が多い現任教育講習会受講中の看護教員および臨床指導者を対象に、化粧や身だしなみに加えて、看護婦の化粧の患者への影響、化粧や身だしなみに関する教育についての考え方などの把握を目的とした。

### 2-2 対象及び方法

平成5年度埼玉県主催の看護教員研修会受講者51名、文部省主催看護教員講習会の受講者16名の計67名を対象に、平成5年8月に質問紙調査を実施した。調査内容は勤務時の化粧の有無、化粧する理由と配慮、使用化粧品の種類、化粧による気持

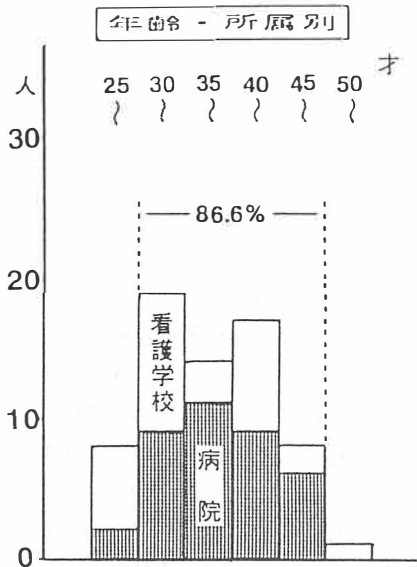


図2.1 対象の構成

ちの変化、化粧以外などこれまでの調査項目に、看護婦の化粧に対する意見と好ましいイメージ、患者に与える影響についての意識、教育指導の必要性を加えた。

対象の構成は図2-1に示すように、30および40代が86.6%を占め、平均年齢は37.0±6.3歳である。勤務場所は病院55.2%、看護学校44.8%で、埼玉県内の在職者が70%である。

### 2-3 結果

年齢別および所属別にみた化粧する割合について(図2-2)日常と勤務時を比較すると、日常

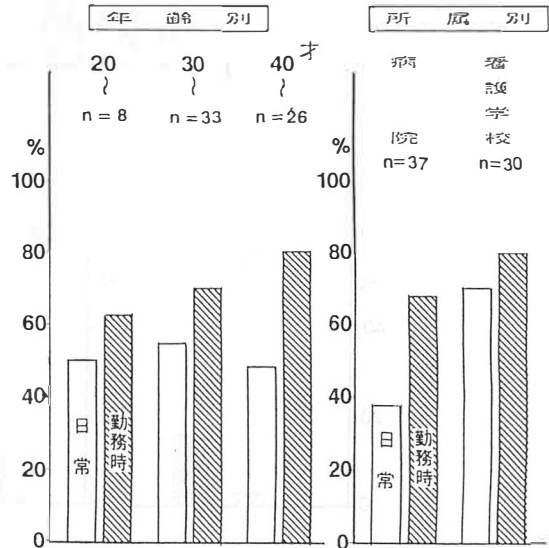


図2.2 化粧する割合

は40代が他の年代より低く、勤務時は年代を増す毎に上昇している。所属別では看護学校勤務の方が高い。

化粧の理由(図2-3)はこれまでと同様「身だしなみ」が一番多く、特に40代は80%以上を占めていた。次は「他人への印象」でやはり年代が増すに従い高い傾向を示した。化粧品の種類(図2-4)をみると、ファンデーション、口紅、ほほ紅といった一般的な化粧品は、年代に比例して高くなっているが、眉ずみは逆に若い年代に多く、アイ

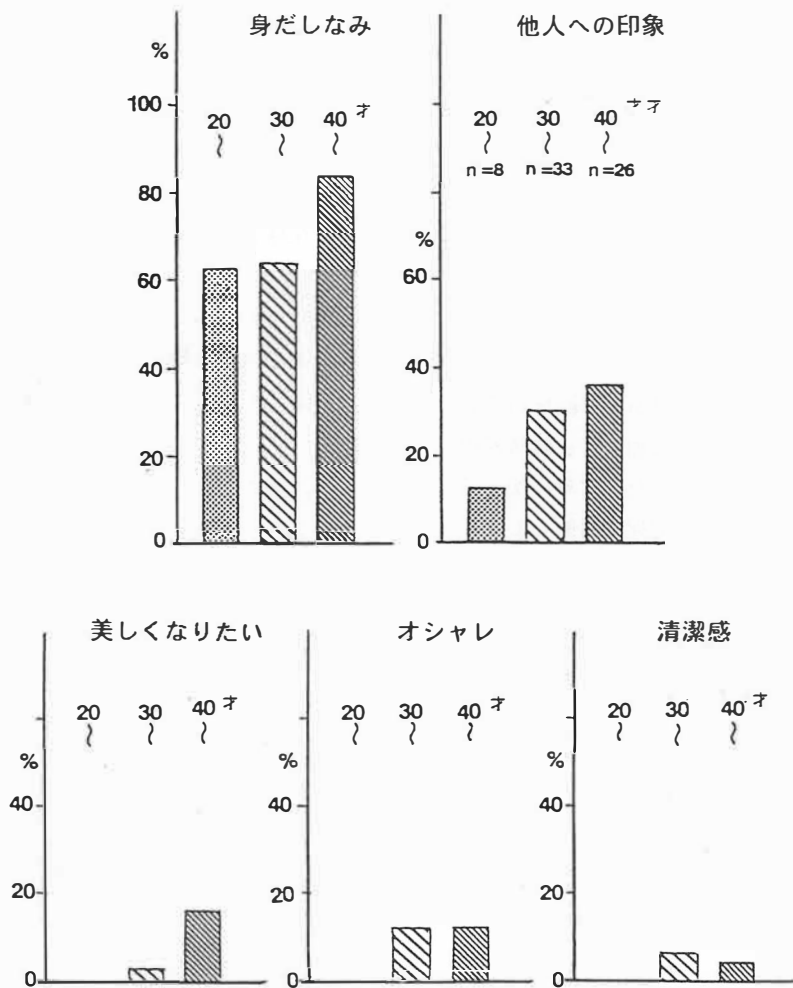


図2.3 化粧の理由

シャドー、アイライナーも年代に比例しておらず、これらは個性によるちがいと思われる。化粧に当たっての配慮(図2-5)は、「薄化粧」と「香り淡泊」であり40代にやや高い傾向を示し、これまでの調査を裏付けるものであった。

また患者への影響を「意識する」の回答は、年代に比例して高率となり、40代は100%を占め、「意識しない」の回答がみられるのは34歳以下であった。

患者への影響を意識した自由記述内容として

①患者に不快感や刺激を与えない ②香水などの強いにおいをさける ③夜勤あけの疲れた顔や顔色の悪さは患者に心配をかける ④初対面は外観からイメージされるなどがあげられていた。

看護婦は化粧をした方が「よい」の回答と「気になる」化粧は共に年代に比例して高くなり(図2-6)気になる内容の記述は ①厚化粧 ②きつい香りの化粧品 ③派手な化粧などであり、化粧への配慮と逆の内容であった。化粧による気持ちの変化は「非常に」と「少し変わる」をあわせ

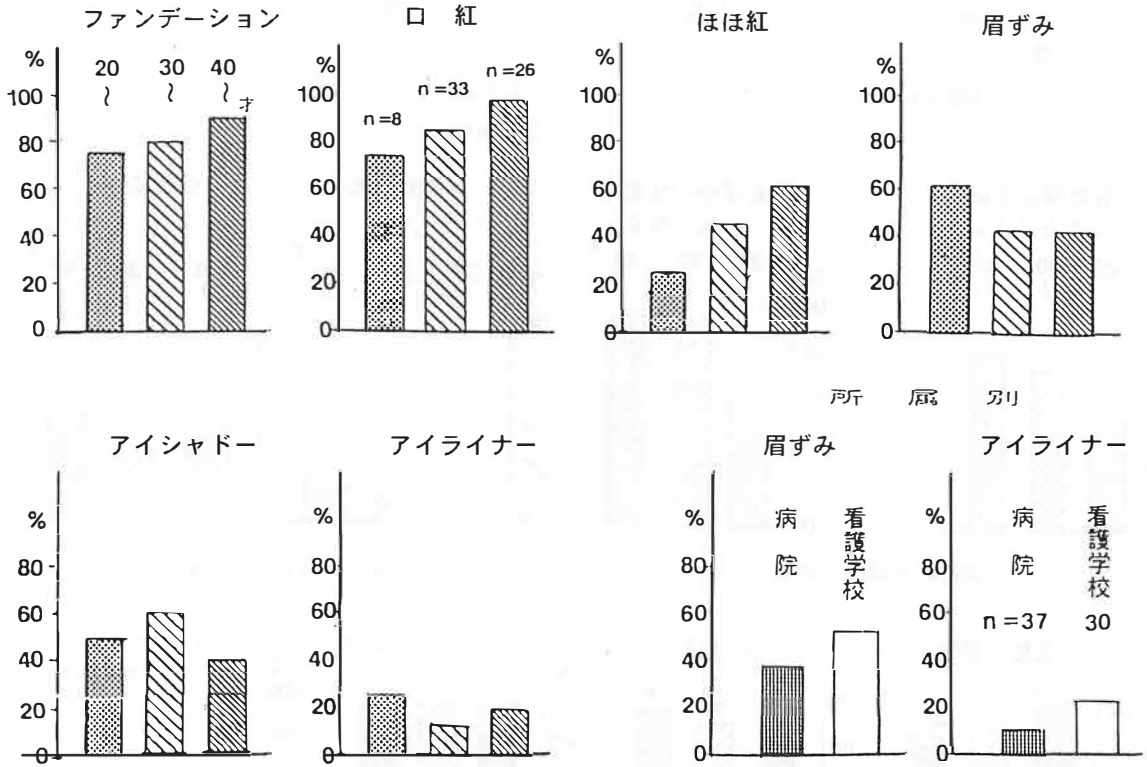


図2.4 化粧品の種類

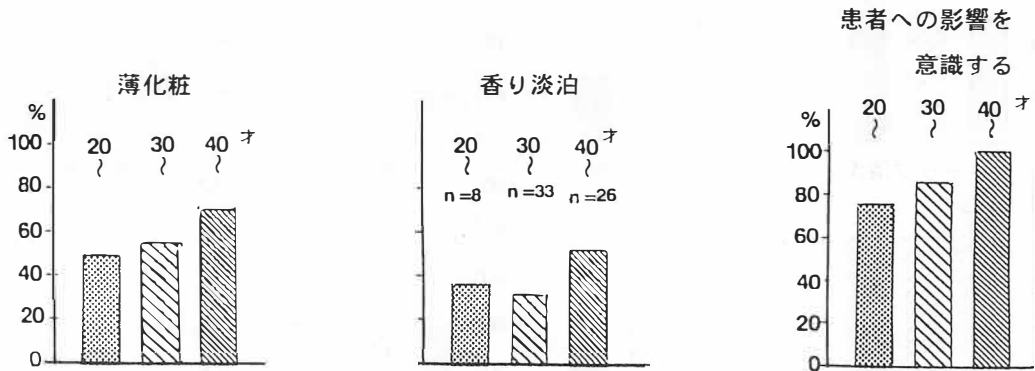


図2.5 配慮

ると、20および30代で約60%、40代では約80%の高率であった。(図2-7) 変化の内容は「気持ちをはきたて明るくなる」「気持ちがシャキッとひきしまる」など緊張感と気持ちの高揚を示すものであった。

化粧以外の身だしなみは清潔感が重視され、ユニフォームや靴のデザイン、ピアス、ハンカチーフ(ポケットチーフ)などおしゃれ感覚をとり入れる意識が、若い年代に多い傾向であった。(図2-8)

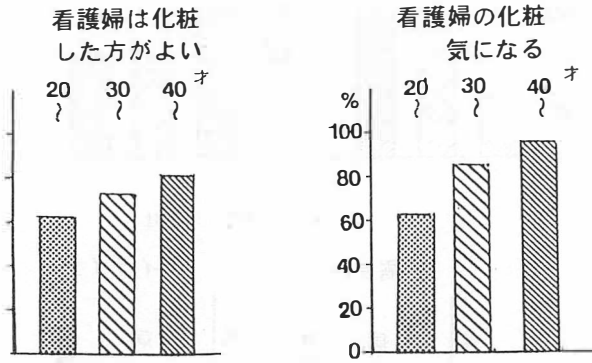


図2.6 看護婦の化粧

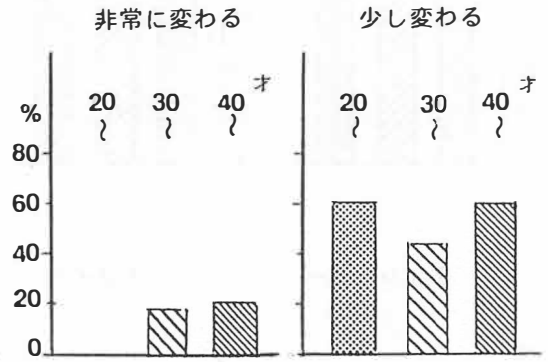


図2.7 きもちの変化

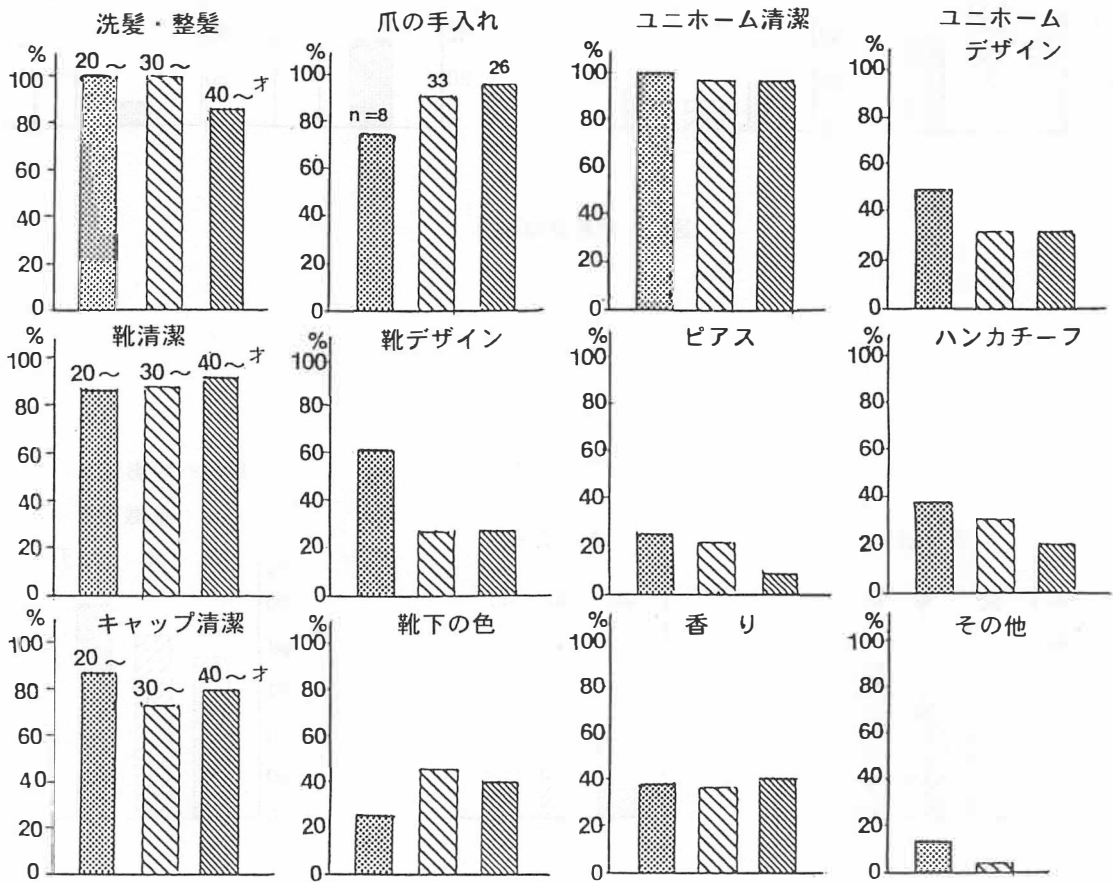


図2.8 化粧以外の身だしなみ

看護婦の化粧に関する好ましいイメージとして6つの選択肢のうち、どの年代も1位に「清潔でさわやか」を選び、2位に「健康で明るい」、3位は「おだやかで優しい」であり、「エレガントで上品」「知的でクール」は低率を示し、「はつきり個性的」は皆無であった。(図2-9)看護婦の化粧や身だし

なみに関する教育・指導については「必要である」と75%が回答し、年代別では20代と40代が30代に比べやや高い傾向であった。どこで希望するかは基礎教育においてが20代に高く、30および40代は就職時のオリエンテーションで希望するものがやや高い傾向であった。(図2-10)

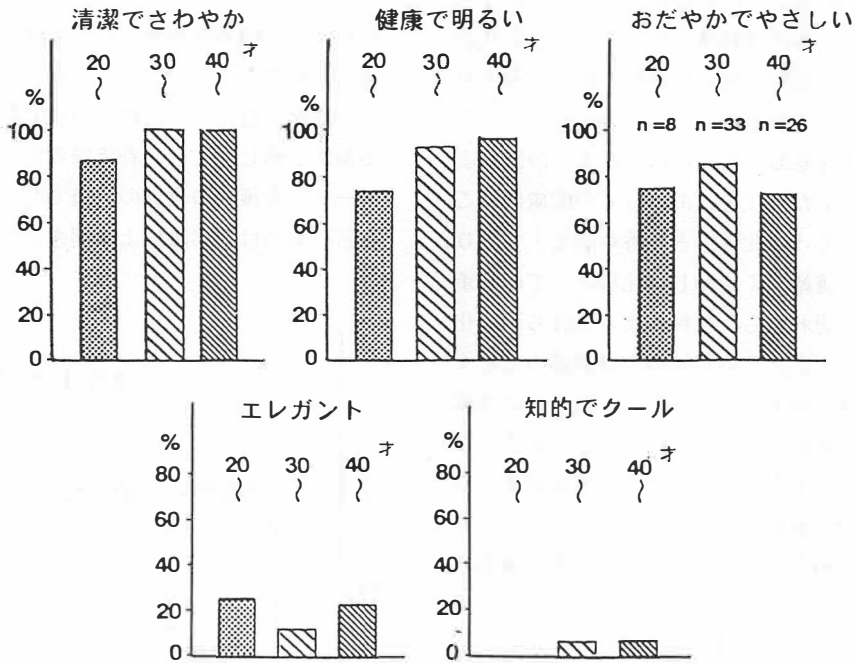


図2.9 看護婦の化粧はどうあればよいか

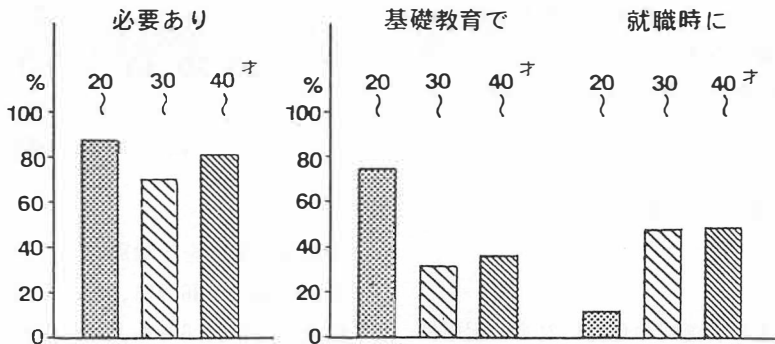


図2.10 化粧についての教育・指導

## 2-4 考察

調査Ⅰ・Ⅱの対象は20代が過半数を占め、30および40代は35～37%であったが、調査Ⅲではこの年代が87%を占めていた。職位別でもこれまでの調査対象はスタッフが70～80%であったが、今回は約10%であり前述の中堅リーダーが大部分であった。

結果にみられるように勤務時に「化粧をする」ものは高率で、谷津は特殊であることがわかり、これまで以上に化粧に関し肯定的であると考えられる。化粧をする理由としては「身だしなみ」が高率で、他人を意識した回答はこれまでの調査より上まわっていた。化粧にあたっての配慮は、これまでと同じく「薄化粧」と「香り淡泊」であり、この2点は看護婦にふさわしい化粧としての必須条件であると思われる。化粧による気持ちの変化も高率であったが、その記述内容は前述のごとく積極的な行動、仕事への動機づけ、気持ちの高揚を示すものが大部分であり、内にもてる魅力をひき出す原動力ともなっていることがうかがえ、これまでの調査を裏付けるものであった。

化粧以外の身だしなみとしては清潔感が重視され、化粧についての意見、好ましいイメージとも一致している。ここでは化粧や身だしなみについて、患者に与える影響を意識したことが「ある」と90%が回答し、「ない」のは10%以下で年代的には34歳以下であったことに注目しておきたい。つまり看護のキャリアを積むに従い患者との教育的・治療的關係において、看護婦が患者をどうみるかと同時に患者が看護婦をどうみるかという治療的環境としての自己の存在に気づいていくことが重要と考えるからである。

## 3 調査

### 3-1 目的

調査Ⅲまでにより看護婦の化粧に対する配慮は、「薄化粧」と「香り淡泊」であり、患者に不快な刺激を与えぬよう患者への影響を意識している看護婦が多く、年代に比例して高率となっているこ

とが明らかとなった。では看護を受ける側の患者は、看護婦の化粧についてどうみているのであろうか。その意識を探ることを目的として入院患者を対象に調査を行った。

### 3-2 対象および方法

調査Ⅰで対象とした浦和市内の1総合病院に、平成5年3月9日の時点に入院中で調査に応じてくれた患者60名を対象とした。調査内容は、看護婦は化粧をしていた方がよいか、「感じよい」化粧の程度、看護婦の化粧について気になったこと、不愉快と感じたこと、看護婦の化粧の好ましいイメージ、看護婦の化粧の有無で受ける感じなどである。方法は質問紙による聞きとり調査とした。

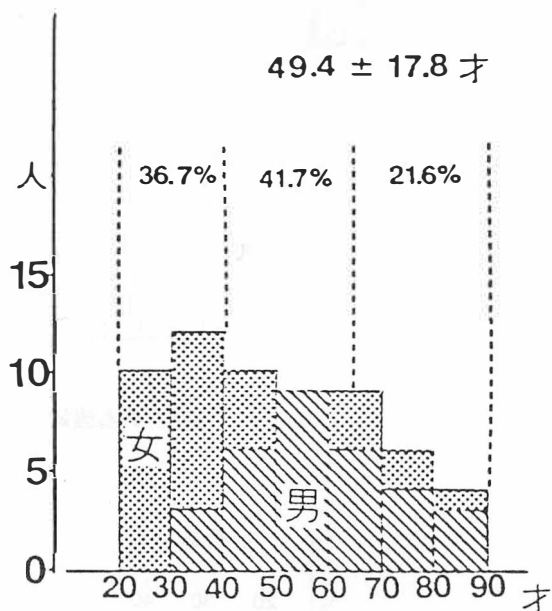


図3.1 対象の構成

対象の構成を年齢別にみると図3-1のように20および30代が36.7%、40から64歳までが41.7%、65歳以上が21.6%を占め、男性31名、女性29名で年齢平均は49.4±17.8歳である。入院病棟は男性の場合内科21名、泌尿器科10名、女性は産科18名、内科・外科11名である。

3-3 結果

看護婦は化粧をしていた方が「よい」の回答は、男性80.6%、女性96.6%で女性の方が多く、「いいえ」は男性1名のみであり化粧に対し看護婦以上に肯定的であった。(図3-2)「感じがよい」化粧の程度は薄化粧が一番多く71.7%であり、男性67.7%、女性75.8%でやはり女性の方が多い傾向を示し、厚化粧は皆無であった。(図3-3)その他についての内容をみると、男性は「その人の自由」「普通でよい」「化粧をしていた方が明るくなってよいが強烈なおいは困る」などであり、女性の場合は「その人の肌にあわせ似合った化粧」「顔がよくみえる化粧」「自分にあった節度ある化粧」などがみられ、化粧に対しより具体的に

なっていた。

看護婦の化粧が気になったことが「ある」のは、男性12.9%、女性20.7%で女性がやや多い傾向であった。その理由は、男性では「厚化粧」「起床時に濃い口紅をみるとキョツとする」であった。女性の場合全員産科入院患者であり、派手な化粧と濃い口紅に加え「香水のきついいにおい」があげられ、逆に化粧をしていない人も気になるとして、看護婦の化粧で不愉快な思いをしたことが「ある」のは、やはり産科入院中の女性患者であり、その理由としては、特に妊娠悪阻の時に香水および化粧品のおいにおい、口紅の光りをあげていた。男性患者の場合は不愉快な思いをしたことは「ない」と回答し、化粧をしていない方が不愉快だと

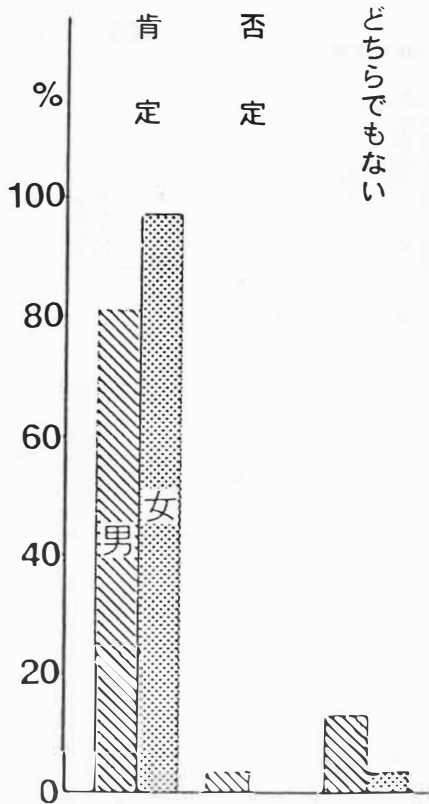


図3.2 看護婦は化粧をしていた方がよいか

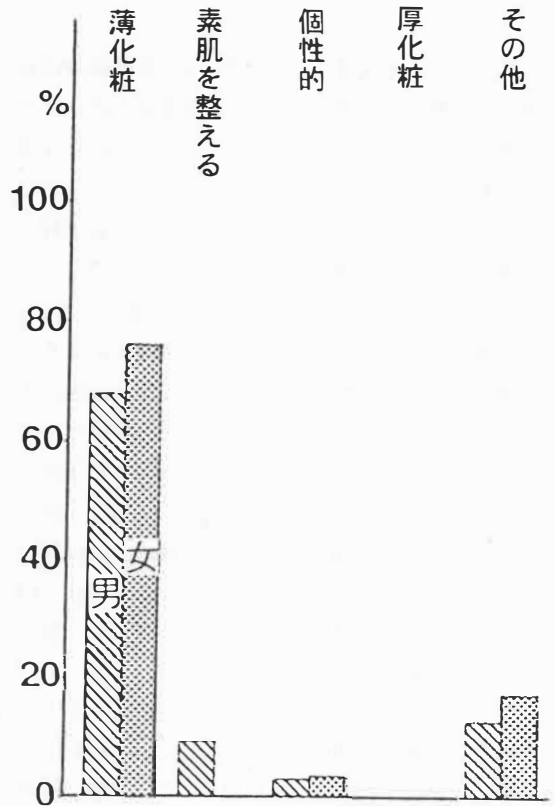


図3.3 「感じがよい」化粧の程度



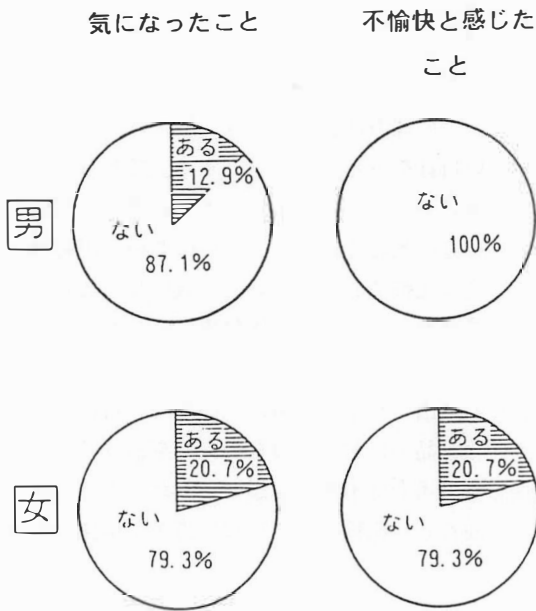


図3.4 看護婦の化粧について

述べているものもあった。(図3-4) 看護婦の化粧はどうあればよいかについて、調査Ⅲと同様6つの選択肢により選んでもらったところ、1位「清潔でさわやか」、2位「健康で明るい」、3位「おだやかで優しい」であり、選び方の順位は看護婦と一致していた。性別では、男性は上位3位までの順位がはつきりしており、女性は「健康で明るい」31.2%を1位に、「清潔でさわやか」と「おだやかで優しい」は31.0%の同率2位で、1位とは僅少差であった。(図3-5)その傾向を年代別順位づけでみたのが図3-6である。「健康で明るい」を1位にしたのは、多い順に20および30代が50%と半数を占め、40から64歳までは45%、65歳以上では33.3%になっていた。2位への順位づけは、40から64歳までが45%で一番多く、20および30代が一番少なく20%、65歳以上は中間であった。3位への順位づけは一番少ないのが40から64歳までであった。すなわち20および30代において1位への順位づけが多く、40から64歳までは1位、2位が同率、65歳以上ではいずれも同率であった。

「清潔でさわやか」の1位順位づけは、65歳以上が際立って高率(77.8%)で、20および30代が40%、

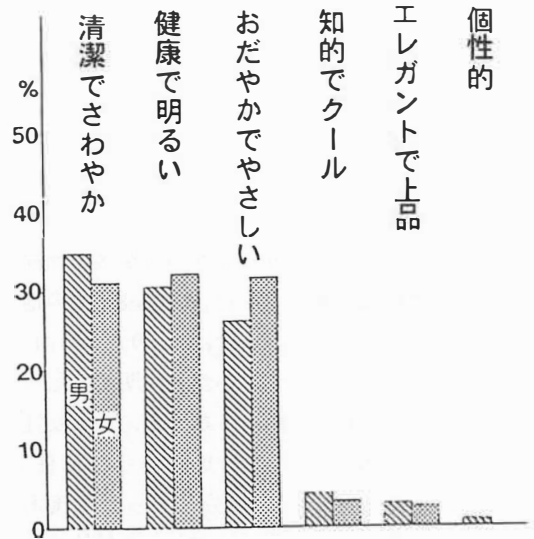


図3.5 看護婦の化粧の好ましいイメージ

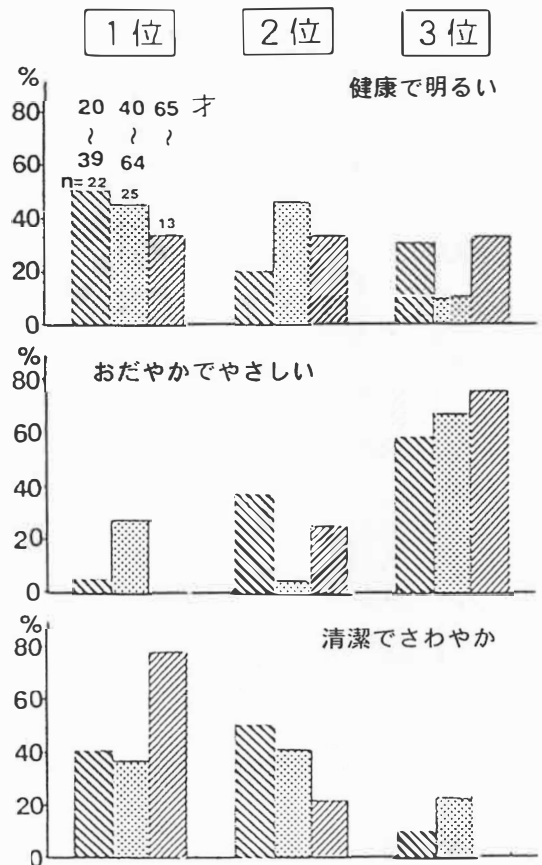


図3.6 看護婦の化粧の好ましいイメージ 世代別順位づけ

40から64歳までは36.4%であった。2位順位づけは、20および30代、40から64歳まで、65歳以上の順となっていた。

「おだやかで優しい」は、3位への順位づけがどの年代も多く、20および30代では57.9%、40から64歳までは66.7%、65歳以上では75%で年代が増すにつれ高率となっていた。

化粧を「している」看護婦と「していない」看護婦から受ける感じについて、これまでの調査結果を基に看護婦の化粧と関係がある形容詞対を7対選び、5段階評定をしてもらった結果が図3-7である。

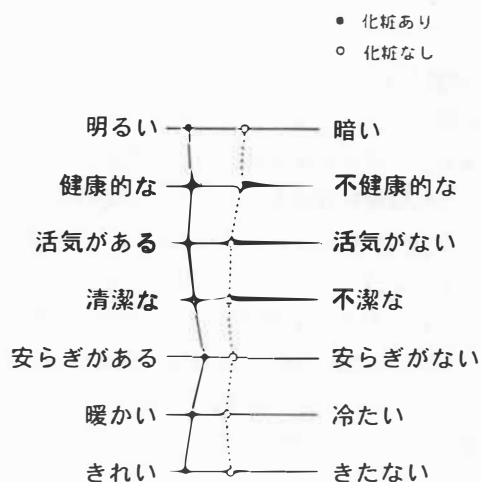


図3.7 看護婦の化粧の有無で受ける感じ

化粧の有無で受ける感じの差が大きい順に列挙すると次のようであった。

全体では

明るい	暗い
健康的な	不健康的な
きれいな	きたない
活気がある	活気がない
清潔な	不潔な
あたたかい	つめたい
安らぎがある	安らぎがない

それを年代別にみると次のようであった。

20および30代

健康的な	不健康的な
明るい	暗い
活気がある	活気がない
きれいな	きたない
清潔な	不潔な
安らぎがある	安らぎがない
あたたかい	つめたい

40から64歳まで

明るい	暗い
健康的な	不健康的な
きれいな	きたない
活気がある	活気がない
あたたかい	つめたい
清潔な	不潔な
安らぎがある	安らぎがない

65歳以上

明るい	暗い
健康的な	不健康的な
清潔な	不潔な
あたたかい	つめたい
きれいな	きたない
安らぎがある	安らぎがない
活気がある	活気がない

3-4 考察

対象が入院中の患者であり、看護婦から直接的なケアを受けていることもあって、看護婦に好意的な回答が寄せられたと考える。しかし不快や気になる内容について率直に答えていることから、結果をそのまま受けとめてよいと思われる。化粧に関しては、していた方が「よい」と看護婦以上に肯定的であり、「感じがよい」程度は薄化粧と香り淡泊であって、看護婦を対象としたこれまでの調査と全く一致していた。したがってこの2点は看護婦に望まれる化粧の程度といえる。強い香りは患者にとって刺激的かつ不愉快であり、特に妊娠悪阻など匂いに敏感で気分が左右される患者

への配慮は、これまでと同様重要であることが証明された。

看護婦の化粧に対する好ましいイメージとして選択された「清潔でさわやか」「健康で明るい」「おだやかで優しい」の上位3つは、看護婦のイメージとして患者が希求している現れであり、看護婦のイメージは患者に反映するといえよう。つまり健康回復を願う患者は、気分的にさっぱりした清潔でさわやかなイメージ、明るく元気づけられる健康で明るいイメージ、親しみやすく安らぎが感じられるおだやかで優しいイメージを求めていると考えられる。

これを年代別の順位づけでみると、若い年代の患者は「健康で明るい」を1位に、「清潔でさわやか」を2位に「おだやかで優しい」を3位にしており、何れも半数を占めていて順位づけが明確である。40～60歳までの中年層の患者は「健康で明るい」が1位および2位同率であり、「清潔でさわやか」は2位、「おだやかで優しい」は順位づけでは3位であるが66.7%と他に比べ高率であり、ここに特徴があるといえる。65歳以上では「清潔でさわやか」の1位順位づけが他に比べ高率で、「健康で明るい」は2位と3位が同率で、3位の「おだやかで優しい」は75%を占め、他に比べ

極めて高率であり特徴的である。つまり「おだやかで優しい」は順位づけでは3位であるが、年代を増すに従い高率を示す傾向と言える。

## 4 調査V

### 4-1 目的

これまでに看護婦の年齢的な要因も考慮に入れた対象を選択し調査を進めた結果、化粧による気持ちの変化が行動に及ぼす影響について示唆された。そこで調査の最終として気持ちの変化に焦点をしばり、行動の動機づけとなる要因を詳細に調べることを目的として検討を行った。

### 4-2 対象および方法

調査Ⅲと同様埼玉県、および文部省主催の看護教員講習会平成6年度受講生99名を対象に、平成6年11月に質問紙調査を実施した。調査内容は勤務時の化粧の有無、化粧する理由ならびに配慮、化粧による気持ちの変化に、気持ちの変化を表現した23項目に対する4段階評定を加えた。対象の構成の年代別では、20代は10.3%、30代は69.0%、40代は20.7%で平均年齢は35.0±5.0歳であり、調査Ⅲの対象に比べ30代が多い。

表 1 : 気持ちの変化 23項目の相関

項 目	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
1 自分に自信がもてる	0.669	0.441	0.529	0.601	0.517	0.582			0.426						0.441	0.400							
2 気持ちが前向きになる	1.000		0.471	0.560	0.610	0.431									0.462	0.535	0.511		0.411				
3 気になる部分を隠せる		1.000	0.614			0.448										0.461						0.438	
4 対人意識が高まる			1.000	0.472	0.483	0.447			0.502	0.451					0.572	0.501	0.501		0.408			0.416	
5 気持ちが明るくなる				1.000	0.602	0.534			0.561	0.522	0.417	0.447	0.481	0.591	0.651	0.501							
6 人と会うのが楽しくなる					1.000	0.431	0.405	0.448	0.462	0.551		0.447		0.502	0.531	0.430							
7 きれいになったような気がする						1.000			0.426				0.462			0.482							
8 女らしいしぐさを心がけるようになる							1.000	0.451		0.441				0.451	0.492								
9 身だしなみにまで注目がはらえる								1.000	0.427	0.431													
10 気持ちにハリがでる									1.000	0.551	0.451	0.531	0.691	0.621	0.641	0.701			0.471		0.451	0.461	
11 外向的になる										1.000	0.421	0.431	0.431	0.701	0.701	0.481	0.430						0.401
12 人の明るい印象を与える											1.000	0.422	0.452	0.501	0.481	0.431							
13 すっきりした気持ちになる												1.000	0.418	0.491	0.580	0.521	0.441						0.436
14 気分転換ができる													1.000	0.521	0.511	0.671				0.447			
15 積極的になる														1.000	0.721	0.421							0.477
16 生き生きしてくる															1.000	0.491						0.401	0.541
17 気持ちがひきしまる																1.000	0.530				0.471	0.541	
18 背筋がしっかり伸びる気持ちになる																	1.000	0.491			0.481	0.451	
19 仕事をすらすらという気持ちになる																		1.000				0.688	
20 顔色が悪いをおこなうことができる																			1.000				
21 化粧品と仕事のせりがえができる																				1.000		0.662	
22 仕事に行くという緊張感がある																					1.000		
23 やさしい気分になる																						1.000	

☆提示したものはすべてP<0.05以上の有意差を有する

表 2 : 気持ちの変化 23項目の因子分析

	項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
活気・気持ちのゆとり	生き生きしてくる	-0.746				
	外向的になる	-0.714				
	積極的になる	-0.684				
	すっきりした気持ちになる	-0.630				
	やさしい気分になる	-0.611				
	身だしなみにまで注意がはらえる	-0.513				
	背筋がしっかり伸びる気持ちになる	-0.478				
	人に明るい印象を与える	-0.441				
	文らしいしぐさを心がけるようになる	-0.438				
対人意識の高まり	自分に自信がもてる		-0.823			
	気持ちが前向きになる		-0.686			
	きれいになったような気がする		-0.655			
	対人意識が高まる		-0.561			
	気持ちが明るくなる		-0.546			
	気になる部分を隠せる		-0.542			
	人と会うのが楽しくなる		-0.537			
仕事への意欲	仕事に行くという緊張感が出る			-0.826		
	仕事をするぞという気持ちになる			-0.748		
	私生活と仕事のきりかえができる			-0.617		
気持ちのハリ	気分転換ができる				-0.718	
	気持ちにハリがでる				-0.560	
	気持ちがひきしまる				-0.450	
顔色のおぎない	顔色が悪いのをおぎなう ことができる					-0.622
	累積寄与率	19.39	34.22	46.12	54.41	58.97

#### 4-3 結果

- (1) 勤務時に「化粧する」ものは78.8%で、理由は身だしなみ53.9%、他との組み合わせ28.1%で両者で82%を占めていた。
- (2) 配慮は、薄化粧44.3%、香り淡泊13.6%、両者の組み合わせ11.3%で調査Ⅲに比べ低率であり、なしが25.0%を占めていた。
- (3) 化粧による気持ちの変化は「非常に変わる」16.9%、「少し変わる」73.0%で計89.9%は調査Ⅲよりわずかに高率であった。
- (4) これまでの調査の自由記述から選んだ気持ちの変化の表現23項目については、表1のようにかなりの項目間に相関がみられた。
- (5) 気持ちの変化の表現23項目に対する回答から、因子分析により5因子を抽出した(表2)。因子1は活気・気持ちのゆとり、因子2は対人意識の高まり、因子3は仕事への意欲、因子4は気持ちのハリ、因子5は顔色のおぎないにそれぞれ分類された。

#### 4-4 考察

明治41年わが国最初の看護婦による著書といわれる実地看護法<sup>1)</sup>に、“看護婦心得として患者の精神の慰めや衛生を保つ心配りとして何時も麗しき顔で接するように”とある。また「身だしなみ」として“束ね髪、身体の清潔、爪切り、手の荒れを防ぎ、衣服は清潔にして飾らず”と記述されている。

戦後の新制度と言われた看護教育では、看護倫理<sup>2)</sup>に看護婦の容姿として清楚な美しさが求められ、“看護婦の清らかな心の表現は患者の慰めであり、人の目に清らかな感じを与える化粧・身だしなみが望ましく煽情的であってはならない”とある。

一方、日本の化粧品の歴史<sup>3)</sup>によると、明治の初めは洗顔入浴には石鹼は高級品であり、化粧水時代であり、白粉による鉛中毒が問題となっていた。大正時代に入って色白は七難隠すの諺から、自分の肌色を生かす意識を与える色白粉の開発により、化粧の方法が個人表現へとすすむことにな

ったという。さらに戦後アメリカの影響を受けファンデーションが入ってきて、個人の肌の状態に応じた化粧品、無香化粧品、肌色価値観多角化、バイオ口紅およびシャンプーやリンスなどの開発めざましい時代を迎えることになる。1980年代に入ると女性の社会進出が定着し、行動する女性時代となり、自然なメーキャップ、自分らしさの表現へと変遷し、化粧品は幅広い領域に関連した総合人間科学の観点から研究開発が行われるようになってきた。

この化粧品の進歩発展は、看護婦の化粧にも大きく影響を及ぼしていると考えられる。かつて化粧は派手でけばけばしく刺激的であるため、病人を看とる看護婦の身だしなみとしては、ふさわしくないとされていた。しかし今回の一連の調査では、看護婦も患者はそれ以上に看護婦の化粧に対し肯定しており、むしろ化粧をしていない方が不愉快だとしていること、看護婦の患者への配慮が患者の意識と一致していること、最終調査結果で示された気持ちの変化の内容は、顔色のおぎない、気持ちのハリ、対人意識の高まり、活気などでこれらが仕事への意欲に連なって、生き生きと働く原動力になっていることが明らかになった。つまり看護婦の化粧は単に外観だけでなく、看護の姿勢の反映であり、気持ちの変化に関与し、内にある魅力を引き出し、明るく生き生きと意欲的に働く行動への動機づけとなっていることが分かったことは大きな意義があると考えられる。

#### 5 結論にかえて

看護婦の教育・指導的立場にある看護部長や婦長は、看護婦の化粧に関しどのような意見を持っているかを把握する目的で、平成6年10月末にこれまでの調査結果の概要を話した上で聞き取り調査を行った。その内容を整理したのが表3である。

対象は看護部長であった70代および60代各1名、現職にある50代2名、40代3名の看護部長および婦長計7名であり、内容は看護婦の好ましい化粧、化粧に関する教育・指導等である。

表 3 : 管理職を対象とした看護婦の化粧に関する意見

質問項目	回答結果・内容
I～1. 看護婦の化粧や身だしなみについて看護教育で教えられたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7名全員が教えられたと回答した。</li> <li>1) 学科目としては看護倫理、薬業的調整、看護管理など</li> <li>2) 教えられた内容としては化粧についてというより「実習時の身だしなみ」として教えられた(日赤)</li> <li>3) 白衣にふさわしい化粧をし、髪を整える</li> <li>4) 白衣、ナース靴の清潔、ナース靴としてサンダル型はいけない</li> <li>5) 毎日朝礼時にユニフォーム、髪をチェックされた(日赤)</li> <li>6) ネックレス、指輪はいけない</li> </ul>
2. 白衣にふさわしい化粧と髪の整え方について教えられたことは	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 薄化粧がよい</li> <li>1) 刺激的でないどぎつい化粧はよくない</li> <li>2) 口紅はうすく、アイシャドーはしない方がよい</li> <li>3) マスカラ、アイラインはいけない</li> <li>4) 顔色が悪いときは頬紅でカバーする</li> <li>5) 特に深夜勤時起きっぱなしの顔、髪ボサボサはいけない</li> <li>・ 髪の整え方</li> <li>1) 髪が襟足にかからぬようにショートカットにするかあげてとめる</li> <li>2) 前髪をたらさぬように下を向いた時にグラッとならぬように</li> <li>3) 髪が襟元につかぬようネットをかぶる(日赤)</li> </ul>
3. 就寝時にオリエンテーションされたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「はい」が6名、「特になかった」は1名～ただし日常勤務中度が過ぎていた時は注意された。例えば患者から麻酔が覚めてみたら口紅コッチリ、アイシャドーが濃い看護婦は嫌と言われ、注意</li> </ul>
4. 化粧したいと思ってもできないことがあったか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 特にない、薄化粧、口紅位でそれ以上したいと思ったことはない</li> <li>・ マニキュアが好きだったがいけないと禁止されできなかったので爪を磨いた(日赤)</li> </ul>
II～1. 現代看護婦の化粧に関する意識をどうみているか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 最近のクリニックや近代的な病院では看護婦のオシャレに積極的</li> <li>例えば</li> <li>1) ポケットテーブル白にうつる柔らかい色は患者さんに安らぎを与える</li> <li>2) ナースリング 手がきれいに見える</li> <li>3) 小さなピアス</li> </ul>
2. 化粧をする事についての意識が変わったと思うか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 変わってきた。昔は化粧をしない看護婦が多かったが女性の社会進出、化粧品の進歩、一般社会の化粧に影響されていると思う</li> <li>・ 見かけだけでなく看護の姿勢の反映である。化粧により自分に自信をもって笑顔で接することができる</li> </ul>
3. 勤務場所、世代による違いがあるか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 若い人は化粧をしなくても肌がきれい一口紅はつけた方がよい</li> <li>・ 中年すぎてもきれいにしたいと思う人が多くなった～いくつかになってもその人にあった薄化粧</li> <li>・ 勤務場所の外系、病棟別は特に意識しないがクリーンルームは化粧しない、手術室はしている</li> <li>・ 卒業生をみていると1年目は化粧しない人が多いが外出する機会が多くなると化粧する人が多くなる</li> <li>・ 病院の外では一般社会の女性と違いがなくなった</li> </ul>
4. 化粧をするのは自分のためか、他者を意識してのことか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分と他者(特に患者さん)の両方である</li> <li>・ 誰と接するかによって違う</li> </ul>
III～教育・指導上の留意	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 化粧の程度と化粧以外の身だしなみ</li> <li>1) 化粧はその人にあった薄化粧、口紅を奨励</li> <li>2) 香りは患者さんに刺激を与えぬよう、ほんのりと</li> <li>3) 結婚指輪はよいが石の入った物はだめ</li> <li>4) 白衣とのつりあい、清潔感、清楚な感じがよい</li> <li>5) 化粧は身だしなみであり、全くしないのはよくない</li> <li>6) アイシャドーは注意してどぎつくつけるのはどうかと思う</li> <li>・ 紫系はよくない、特に夜勤の時は患者にとってアイシャドーは刺激的</li> <li>7) 看護の職場と外出先によって使い分ける</li> </ul>

表3にはこれまでの調査結果が集約されており、さらに化粧に関する教育・指導上の配慮として、現代看護婦の化粧に関する意識、特に若い世代は勤務する場所に応じて身だしなみの内容におしゃれ感覚をとり入れ、自己表現がなされるように変わって来ていることを受けとめた上で、個々人にあった薄化粧を奨励したいと考えていることに注目したい。

## 引用文献

1. 大関 和、“実地看護法(復刻版)”、医学書院(1908)
2. 橋本寛敏、“看護倫理”、医学書院(1964)
3. 光井武夫、“新化粧品学”、南山堂(1993)
4. 大河原千鶴子、コスメトロジー財団、研究業績 中間報告集 3 51(1993)